

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

フクギについて（覚書）

著者	田名 真之
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	沖縄文化研究
巻	42
ページ	315-325
発行年	2015-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/9960

フクギについて（覚書）

田名 真之

沖縄らしい風景といえば、青い空と赤瓦屋根そして白い道（珊瑚の道）といった離島の佇まいがある。それにどこまでも澄み渡った青い海と白砂の組み合わせも落とせないだろう。まだまだいくつもあげられるだろうが、もう一つだけこれぞ沖縄らしいと万人が納得する景觀が、フクギに囲まれた民家であり、集落だろう。沖縄本島北部本部の海洋博公園にほど近い備瀬集落が代表的だろうが、国頭や大宜見村にも備瀬に劣らないフクギのある集落がいくつもあ。さらにフクギが屋敷林となっている景觀は本島北部のみではない。備瀬や謝敷ほどではないにしろ本島中南部や久米島、宮古、八重山に存在し、沖永良部島などでもみられるという。

沖縄戦直前に米軍機が撮った空撮写真を見ると沖縄本島の全域で、フクギに囲まれ守られた集落の存在を確認することができる。かつての沖縄には数多くの「備瀬」が存在していたのだろうか？ 現在の備瀬集落の佇まいが、かつての沖縄の集落景觀を想起させるのである。

ところで、フクギは民家の屋敷林というだけでなく、御嶽にも巨木があつたりするのだが、そのすべてが人間が意図的に植えたものとされている。八重山には自生とされるフクギもあるようだが、少なくとも本島では自生の話はない。現存するフクギの整然としたありようや戦前の集落を囲んでいる写真からして、防風・防潮林などとして沖縄本島のみならず琉球国の全域にわたってフクギは植栽された可能性が高いのである。そうしたことを主導できるのは王

府以外には想定できないのであり、王府が政策的にフクギを植栽した、となりそうである。

それではフクギは沖繩にいつ頃持ち込まれ、どのような政策的な取り組みがなされてきたのだろうか。みていくことにしよう。

1. フクギの登場

西原の内間御殿は尚円の旧宅として知られている。沖繩戦で屋敷内部の建物は破壊され、仮の小屋が建てられているが、屋敷を囲む石垣とフクギは往時の面影を留めている（現在西原町によつて整備事業が取り組まれている）。その内間御殿の石垣を築き、東西の建物を整備したのは尚敬王代で、一七三七～三八年とされている。ところで、屋敷内に石垣に沿つて等間隔で屹立するフクギの樹齡は、仲間勇栄氏らの調査によると二七〇～二八〇年とされている。¹⁾つまり内間御殿が整備された際にフクギも植えられたことになる。

ここに興味深い史料がある。首里王府と八重山在番（王府が派遣した八重山駐在員）、藏元との往復文書『参遣状』の記事である。²⁾

覚 玉ふい木并ふく木種子御用有之候間、毎年差渡せ候様二去申年申越置、年々

差渡来候処、もはや御用相済候間、来年より可召留候、以上

九月十八日

安里親雲上

兼城親方

八重山島 在番

この記事は他の史料から雍正八（一七三〇）戌年の出来事であることが分かる。内容は「玉ふい木」（サキシマハマボウ）と「ふく木」の種子が入用なので毎年届けるように去る申年に申しつけたが、毎年届けてもらって、もう御用済みなので、来年からは届けなくても良い。というものである。つまり、王府は八重山から玉ふい木とふく木の種子を毎年送らせていた、というのである。申年が二年前の一七二八年なのか、一四年前の一七一六年なのかは分らない。二年では短かいし、一四年は長すぎるような気がするのだが。いずれにせよ、王府は何らかの目的で種子を取り寄せていたことになる。では本島にはフクギがなかったのかというと、そうではない。これ以前に存在した記録がある。

尚敬王の冊封副使徐葆光の著した『中山伝信録』（一七一九年）の「物産」の項に⁽³⁾

福木 葉如冬青、特大、対節生、長二寸許、如腰子形、厚而光沢、一名定盤木、

樹直上、長丈余、四時不凋、葉可染綠色、開子黃花、結実、可食

徐葆光が直接見たかどうかは定かでないが、記された情報は確かにフクギの特徴をよく示している。葉は冬青^{そよご}のように楕円形で堅く、大きくて対になっていて二寸（六センチ）ほど、木はまっすぐ伸びて、三メートル余り、黄色の花が咲き、実は食せる云々とある。フクギで間違いない。となると、先の八重山から大量の種子を送らせたことをどう理解すればいいのだろうか。去る申年が一七一六年とすれば徐葆光来琉の三年前となるが、それが成長して云々との話でもなからう。フクギはあることはあったが、多くはなかった、大量に必要なことがあって、多く存在していた

八重山から取りよせた、といったところだろうか。大量の種子は内閣御殿などに植えたのだろうか。時代的には概ね符合するのだが。

2. フクギは御用木？

蔡温の「農務帳」(一七三四年)に屋敷囲の条文がある。⁽¹⁾

一、近年、中頭、島尻竹木相絶…弥以竹木植付山仕立且村囲、屋敷囲、其外にも所見合材木の諸木植付候様に可致候、此儀国土の重宝不輕事候間、能々入念可相勤事

中頭、島尻の竹木が絶えたので、竹木を植え付けた山を仕立て、村囲いや屋敷囲い、その外にも場所を考えて材木の諸木を植え付けるのが肝要である云々とあつて、屋敷囲いに材木の諸木を植えるとしているが、フクギへの言及はない。一七五二年の「山奉行公事帳」には商売などを禁止する、御法度の諸木として二一の樹種が上げられている。⁽²⁾

檜木、杣、杉、檜、もみ、楠、さほん、よす、かし木、いぢよ丸さち、梓 等々

他の条文で、松、いく木なども肝要なる御用木とある。これらの中にもフクギは含まれていない。八重山から導入したにも関わらず有用な木とされてなかったのだろうか。屋敷林Ⅱフクギはまだ先のことのようにある。

一方、「久米仲里間切公事帳」(一七三五年)には「杣山当并竹山当」の職務として次の条文がある。⁶⁾

一、杣、杉、櫟、ふく木其外之用木、山中地合見合、山当頭ニて地頭代申談、在番引合之上年々植増候事

杣や杉、櫟、「ふく木」ほかの用木を山中で地形を見て、山当頭で地頭代と相談して、在番とも調整して年々植え付けて増やしていくようにしなさい。久米島では、杉や櫟と並んで御用木として植えるようにとしている。本島では肝要な樹種二二種に含まれてないが、久米島ではいち早く評価されたとなるが、このずれはなんだろう。

3. 肝要なるフクギ

光緒元(一八七五)年の羽地間切の「覚」にフクギが登場する。⁷⁾

覚 一枘 一いく 一椎 一楠 一よす 一せんたん 一ざふん

但七行、三四月より実付、九十月熟。

一ともん 但正二月より実付、五六月熟

一いちよ 但二三月より実付、八九月熟

：

一福木 但正二月より実付、七八月熟

一 榕 一 古把梯斯こばてす（樹の名なり）

但二行、二三月より実付、八月月熟

：

右之諸木実付又は熟之時節相記差上候様被仰渡趣、承知仕候、：

同様の記録が「富川親方八重山島杣山職務帳」（一八七四年）に出ている。⁸⁾

一 松種子之事、但九月中限、一 檜木種子之事、但六月中限

一 屋良部種子之事、但十一月限、一 福木種子之事、： 但八月中限、：

右諸木種子之儀、每物成諸村正頭に応じ、定手形割通村々へ相渡、：

月限通山方役人筆者調部方之上可致取納候、：

種子の熟するを待つて集めて納めさせる、ということであろう。フクギは肝要なる木に加えられたことになろう。もう一件、光緒四（一八七八）年の本島北部の間切に出された文書に以下のようにある。⁹⁾

一道筋並松并福木之儀、原主構にて致守護、若伐取候者は一本に付十本づつ科松植替させ候上、科錢三百貫文可申付候事。

フクギが松並木同様に守護の対象とされ、伐り取った者は相応の罰を与えるとしている。

4. フクギの利用

フクギは活用範囲が広い。その一つが防火である。『大島筆記』（一七六二年）には次のように見えている。¹⁰

一 火防垣 葉は慎花草の如にして厚し、是を垣にするによく繁り、火のとふさぬ者也。厚く栽たれば火災にも半分程は焦れども、夫より内えは透通らず。

注に「火防垣 福木の垣根」とある。一七六〇年代、フクギが火災に強いことが大島にも知られていたのである。

「富川親方八重山島杣山職務帳」に以下の条文もある。¹¹

一 ふく木之儀肝要成用木候処、染物用として素生能木よりも皮剥取候由不宜候間、向後用事之節は杣山筆者山当共引合曲木より剥取相用候様可申渡事

黄色の染料としてフクギの皮が用いられたが、曲木などを使うようにと指示している。

フクギは家造りの用材としても用いられた。「翁長親方八重山島規模帳」（一八五七年）に以下のようにある。¹²

一 蔵元并在番、同筆者、詰医者、飯屋、桃林寺普請之儀、櫓木、いく木相用、右外頭以下諸役々家作ハふく木、無役奉公人、百姓等家ハ雑木ニテ可作調候也

「富川親方八重山島農務帳」（一八七四年）には「役々勤方并諸事締方之事」として¹³

一 檜木、福木、にか竹、まわてこ、大名竹之儀、面々入用多有之候間、屋敷其外場所見合植付用分無支相達候様可致下知事

フクギは建築用材としては、檜木、いく木に次ぎ、屋敷に有用な樹木として植えるようにと評価されるようになっていたのである。

5. 置県直後のフクギ

明治一四（一八八一）年五月、第二代県令として沖縄に赴任した上杉茂憲は、同年の一月から一二月にかけて民情視察のため沖縄各地を巡回している。その時の「巡回日誌」¹⁴に上杉が訪れた各地の番所や豪農宅の様子が記されている。中北部巡回における宿泊所や休息地でのフクギの部分だけ取り出すと以下ようになる。

- 今帰仁分署 老榕甘木、陰ヲ成シ、皆是四五百年ノ物、傍ニ福木秀茂セリ
- 本部番所 蠣石牆内老榕、福木繞囲ス
- 奥村 金城親安宅 周囲ニ福木ノ生垣アリ
- 名護番所 蠣牆繞囲ス、巨大ノ福木、垣内ニ五、六株秀茂ス、皆數百年ノ者ナリ

- 恩納番所 庭中芝ヲ數キ、其南ニ福樹傘ヲ張りタル如ク秀ツ
- 浦添番所 老松秀茂シ、福木五株、其間ニ挟マリ：

ちなみに休息や宿泊した所で、フクギについての記事がないのは、以下の所である。

- 国頭番所
- 国頭、羽地番所
- 楚洲村 大城久安宅
- 安田村 古堅宗実宅 小篠ノ生垣アリ
- 饒平名村 松島孫助宅 笹ノ生垣アリ
- 済井出村 宮城熊助宅 細木ヲ以テ籬ヲ編メリ
- 具志堅村 上間権兵衛宅
- 宮里村 金久善助宅
- 読谷山番所 老松路ヲ挟ミ、庭ニ芝ヲ數キ
- 北谷番所 阿旦ヲ栽ユ

以上、中北部の番所のフクギについて見た。これだけで即断はできないが、すべての番所がフクギで取り囲まれているということはなさそうである。上杉は国頭番所などにも行っているが、フクギについて触れるところはない。とはいえ触れてないから無かった、とは言えない。が名護にしろ浦添にしろ五株、六株である。

近世のフクギ関連の記述はまだまだ探し出せるだろうが、おおよそのアウトラインは描けそうである。しかし、一七〇〇年代の「参遣状」のあと、蔡温率いる王府がフクギを村抱護、屋敷抱護に最適な樹種として、沖縄全域に政策的に広めた、との仮説はなり立ちそうにない。置県時の有り様からすると、番所でも多くは全面圍繞ではなかった、となる。沖縄戦時の空撮にみえる見事にまでにフクギに取り巻かれた集落の景観は、近代の産物か、との思いにかられそうである。

【注】

- (1) 仲間氏は琉球大学名誉教授で専門は林政学。内間御殿のフクギ二八〇本について樹齢を調査した報告がある。
- (2) 同覧(喜舎場家文書)は年次を欠いているが、他家の『参遣状』の記録で年月日が雍正八年九月と特定できる。『石垣市史 八重山資料篇1 石垣家文書』(石垣市教育委員会 平成七年) 同『八重山資料篇2 豊川家文書』(石垣市教育委員会 平成七年)に収録される「参遣状」は、前者が記事の目録のみ、後者は抄録で、フクギの記事は採用されていないが、後著の他の記事で差し出の安里親雲上や兼城親方が確認でき、彼らが王府の「表十五人」のメンバーであることもわかる。ちなみに前著は以下のように記す。「九 一、玉はい木并ふこ木種子御用無之、被召留候付、問合之事」(一四頁)。
- (3) 『那覇市史 第1巻3 冊封使録 原文篇』(那覇市史編集室 昭和五二年) 一六九頁。
- (4) 『農務帳』(『沖縄県史料 首里王府仕置2』 沖縄県教育委員会 一九八九年) 一二六頁。
- (5) 『山奉行公事帳』(崎濱秀明『蔡温全集』 本邦書籍 昭和五九年) 二六三頁。
- (6) 『久米仲里間切公事帳』(『沖縄県史料 首里王府仕置3』 沖縄県教育委員会 一九九一年) 四六〇頁。
- (7) 『近世地方経済史料 第九巻』(吉川弘文館 昭和三三年) 二二三頁。
- (8) 同上 二七八頁。

(9) 同上 二九四頁。

(10) 「大島筆記」(『日本庶民生活史料集成 第一卷(南島篇) 三一書房 一九七四年) 三五九頁。

(11) 「富川親方八重山島杣山職務帳」(前同 首里王府仕置2) 五〇四頁。

(12) 「翁長親方八重山島規模帳」(前同 首里王府仕置2) 三二四頁。

(13) 「富川親方八重山島農務帳」(前同 首里王府仕置2) 四六九頁。

(14) 『沖縄県史 11巻 上杉県令関係日誌』(琉球政府 一九六五年)。